2012年12月5日発行（年4回 3, 6, 9, 12月5日発行）通巻104号

©小林正典

認定NPO法人
幼い難民を考える会
CARING FOR YOUNG REFUGEES

2012年 12月
NO.104

CYRのホームページが新しくなりました！

（詳しくは、P7で）

Children, Our Future

子どもたちの明日

目 次

「忘れないで」の声を聞く ～被災地支援活動～ ---------- 2～3
【カンボジア】支援の現場から ～アンドン村の家庭訪問～ ---------- 4～5
国内活動 ＜イー・アクセス株式会社＞ ---------- 6
卒園あるばむ ---------- 6
CYRからのお知らせ ---------- 7
カンボジア 子ども絵画展 ---------- 8

幼い難民を考える会（CYR）は、難民となったカンボジアの子どもたちがけんめいに生きようとする姿に触発され、1980年に設立しました。子どもたちが心身ともに健やかに成長し、その保護者が人間らしい生活環境のもとで自立できることが、難民を生み出さない平和な社会につながることを信じ、復興をめざすカンボジアで活動を続けています。

「忘れないで」の声を聞く

11月7日午前10時、東北本線松川駅。快晴。暖かい一日の訪れを予感させた。
CYRの福島訪問は、今年度3度目となる。この日最初の訪問先は、託児施設「子育てサロン（飯舘村）」。今夏、幼児用を含めた遊具や教材を届けた。送付に関わるやりとりを通じて、保育担当者のとても熱心な姿勢がうかがい知れ、お会いするのを楽しみにしていた。

サロン ── 人が集まる場所

飯舘幼稚園の敷地内に建つプレハブで、子育てサロンは活動している。施設は午後の学童と共有、毎週火曜日の10時から11時30分が保育の時間帯。担当するのは、長正サツキさんと佐藤まき子さん、ともに保育士歴20年あまりのベテランだ。

施設の使用料と光熱費は村の公費だが、人件費は出ていない。片道30分～50分かかる車移動の交通費等も持ち出しだ。

サロンを訪れる母子は、多い日で12組16名、子どもの年齢は生後2カ月から就園前と幅広い。訪問時、6名の子どもたちがのびのびと動きまわり、母親たちはにこやかに過ごしていた。日頃、狭い借り上げ住宅で暮らす被災地の母子にとって、20畳ほどもあるサロンの存在は貴重だ。しかし、震災前の子どもたちは、もっと広々とした場所で走り回っていたという。

飯舘村にいたころ

長正さんは、思いやりと信念の人だ。「子どもの健やかな成長には、母親の心身の安定が欠かせない」と、母子で楽しく穏やかに過ごせる場所・時間の必要性を、強く感じていた。その背景には、生活様式や文化の違い、友人を作りにくいなどの理由で、村を離れてしまう若い妻や母親の問題があった。

「こんなとき、同じ境遇の人が集まることのできるサロンのような場所があれば……」長正さんは、訴え続けた。

そして構想から10年、飯舘村に子どもサロンが誕生した。

「子育てサロン」

それでも、諦めない

しかし2011年、震災が発生。住民はさまざまな避難先に移転を余儀なくされる。そのひとつ飯野町で、長正さんは母子のため再び立ち上がり、子育てサロンを再開した。

ここに通う子どもたちの父親には、村を離れることのできない仕事に携わる人が少なくない。借り上げ住宅の点在で、村のコミュニティが失われたいま、サロンの存在はとても大きい。

活動時間帯、保育の中心は長正さんと佐藤さんだが、母親たちも子どもの面倒をみる。

「協力しないと大変なんですよ」長正さんは穏やかに語る。

サロンの意義を認識した村は、長正さんたちにもう一カ所の開設を要望している。予定地は、福島市だ。

母と子への思いやりに溢れる保育士は、村の依頼にどう応えるのだろう……。CYRはこれからも「子育てサロン」を応援し続ける。

CYRが届けたおもちゃで遊んでます♪

11月7日、子育てサロンには笑顔が溢れていた。左から2人目が長正サツキさん。

「子育てサロン」を出た後に向かったのは、同じく飯舘村から避難している子どもたちが通う保育所（川俣町）と、富岡町の保育施設（郡山市の仮設住宅）。その2カ所で保育の先生と統括保育の責任者お二人と会った。

この日は福島県庁子育て支援課にも立ち寄り、避難後の保育状況や支援状況等、特に被害の大きかった沿岸8町村の現状についてお話をうかがった。

多くの問題を抱えつつも、福島は現実を受け入れ善処に努めている。今回の訪問で私たちはそうした人々に会い、ことばを聞いた。それはさまざまな表現だったが、まぎれもない、「被災地を忘れないで」の声だった。

＜福島は、いま＞

- 支援金の支給は進みつつある
- 被災状況や復興計画は被災者それぞれで大きく異なる。画一的援助は適切ではない
- 心に受けた傷や葛藤の問題が大きい。見えない傷こそ痛みが大きい
- 復興は、民間の努力を頼みとしている部分が小さくない
- 復興のためには、情報の発信と受信が必要

被災した人たちの窮状は、続いています。元通りの生活を取り戻すためには、今後、長い年月が必要です。自分の家に戻ることができない人たちは、大勢います。被災地の人々が失ったのは、物やお金だけではありません。未来図までもが奪われたのです。

アンドン村の家庭訪問

カンボジアでのCYRの協力団体「CCDO」は、貧しい家庭を対象とした支援事業を行っている現地NGOです。代表のトラーさんが掲げる目標は、「子どもたちとその家族が、よりよい生活を送ることができる社会」づくりです。

CCDOが保育所運営と就労支援を行なっているアンドン村は、プノンペン郊外にあるスラムです。2005年に市内のスラムから強制移住させられたおよそ260世帯、3,000名あまりが、いつも汚水が溜まる不衛生な地域で生活しています。

CYRはCCDOに、

- 保育教材・遊具・絵本の提供
- 資金援助（給食・保育者給与など）
- 保育の実務的な知識と技術の提供

といった点で協力しています。

CCDOとCYRの支援は、村の生活にどのように役立っているのでしょう。定期的な家庭訪問で、話を聞いています。

劣悪な衛生状態のアンドン村。首都プノンペンの周辺には、このようなスラムが700あまりも点在している。

ライニーさん（58歳）

家族は、娘と娘婿、孫3人です。娘は縫製工場で働いていますが、身体が弱いのであまり稼ぐことはできません。娘婿は建築労働者で、収入は週に$3.75程度です。CCDOの仕事（$2.5～$5/週）は、貴重な現金収入です。

保育所に通う孫は、給食を食べるようになってから、ずいぶん健康になりました。

支援の現場から

<CCDOの就労支援>
・住民にマットの縫製を依頼
・国内外に販路を確保し、経済状況の改善を目指す
・白布は 1kgあたり$0.15、白以外の布は 約$0.09で買い取る

ソク・シエンさん（38歳）

夫婦と子ども8人で暮らしています。

夫の貝拾いの収入は、1日に$2.5～$5程度ですが、それもない日があるので、日々の暮らしは大変でした。CCDOの仕事は家でできて、週に$5～$7.5になるので、生活は楽になりました。

4歳と6歳の子どもは保育所に通うようになってから、皮膚にブツブツができなくなりました。

リーホンさん（52歳）

2006年から住んでいます。家族は、自分と子ども3人に孫2人です。

病気がちで暮らし向きが良くないため、買い取り値の高い白布を担当させてもらっています。孫の面倒に手間がかかり、仕事に割く時間は少ないのですが、週に$2.5～$6.25の収入になります。

以前は保育所に通うことを嫌がっていた孫ですが、今は喜んで出かけるようになりました。

保育所では水浴びができるので（家ではできません）、帰ってくると清潔です。ことばづかいも丁寧になり、いつでもあいさつができるようになりました。

国内活動

CYRカンボジアの活動は、日本での協力に支えられています。

就業時間後の開催にもかかわらず夜の部にご参加いただいたみなさま（左）

日中のワークショップでチョッキン！（下）

イー・アクセス株式会社

総務本部 広報・CSR室 CSR・コンプライアンスG
八木 里薫 さん

イー・アクセスは「すべての人に新たなブロードバンドライフを」を企業理念に、簡単に安心して利用できるブロードバンドサービスを提供する通信サービス企業です。

当社では今夏、社員を対象とした「社会貢献活動推進プログラム」を実施しましたが、そのプログラム選定においてCYR様の「みんなで布チョッキン」の次世代育成と女性の雇用機会創出の考えに賛同し、活動に参加させていただくことになりました。

社内ワークショップでは、始めにカンボジアの現状についてお話しいただいたことで作業の目的が明確になり、参加者から満足のいく活動ができたとの感想が多数集まりました。

「みんなで布チョッキン」の活動目的や内容は社員からの関心も高く、ワークショップ開催後もクチコミにより参加者が増加し、最終的には約80名が活動に参加し、大盛況のうちに終了いたしました。

今後も機会がありましたら、CYR様の活動に参加させていただきたいと考えております。

卒園あるばむ

2012年9月、CYRが運営協力をしているバンキアン保育所の18名と、プレイタトウ保育所の22名の子どもたちが、卒園遠足に出かけました。

ウキウキ乗り込んだ大型バスで訪れたのは、カンボジア国王が住む王宮、王宮近くの公園、そしてウォーターパークです。

遊んで、歌って、踊って、食べて……。
子どもたちは楽しい一日を過ごしました。

←王宮を見学中。観光客のじゃまにならないよう、きちんと並んで歩きました。

伝統楽器を弾いている場所では、卒園式の出し物の音楽が！思わず踊り出しちゃいました。→

■ 定価:1,000円
(送料200円
※10冊以上は無料)

■ サイズ:縦42cm x 横30cm

CYRのオリジナルカレンダー

カンボジアの子どもたち 2013

世界78カ国を飛び回るフリーフォトジャーナリストの小林正典さんが撮影した、子どもたちの笑顔がいっぱいのカレンダーです。

1冊(1,000円+送料)のご購入で、50人の子どもたちに給食を提供できます。

お申し込みをお待ちしています！

書き損じはがき、未使用はがき・切手をあつめています

カンボジアや被災地への郵送料、会員や支援者のみなさまにお便りを送るため、大切に活用します。
どうぞ、ご協力ください！

※ はがきの寄付額は郵便局交換手数料を差し引いた額となります。使用済み切手は集めておりません。

書き損じはがき、未使用はがき・切手のご寄付は、寄付金控除証明書発行の対象です。

170,071円

ご協力ありがとうございます！

2012年6月1日～2012年10月31日の5カ月間のご寄付額です。
ひきつづきご協力を、お願いいたします。

CYRの会員・女性史研究者でもあるノンフィクション作家 山崎朋子さんの連載が、単行本になりました！

『アジア女性交流史　昭和期篇』 岩波書店　480頁
3,150円

同書Ⅷ章では、CYRに関わる女性たちの生きざまに触れています。作者が丹念な取材とフィールドワークで掘り起こした、近代の日本で社会の底辺に生きた女性たちの生活と歴史を、ぜひ、ご一読ください。
本書はCYRを通じてもご購入が可能です。

本サポ！ にご協力を

BOOK・OFF

CYRの寄付プログラム **本サポ！** を通じて、カンボジアと被災地の子どもたち・女性たちへのご支援をお願いします。お申し込みは、ホームページ(http://www.cyr.or.jp/)のバナーをクリック！ お電話やファクスでもどうぞ！
(TEL: 03-3943-6971、FAX: 03-3943-6073)

CYRのホームページが新しくなりました！
URLはこれまでと変わらない http://www.cyr.or.jp です。
より見やすく、情報の発信に心がけて作りました。わたしたちの活動をのぞきに、みなさん、どうぞ遊びに来てください

カンボジア子ども絵画展

一九八〇年、タイ・カンボジアの国境に設けられたカオイダン難民キャンプ。この地が幼い難民を考える会活動の出発点です。大切に保存してきた当時の資料を、このコーナーでご紹介していきます。

内戦で両親を亡くした孤児たちが共同生活を送った施設、チルドレン・センターで暮らす子どもたちが、クレヨンを手に思いのまま描いた絵です。

Mam Kong（当時の年齢は不明）
「描く」という手段を得て表現した絵がこのシーン。
若い心に残された傷痕の大きさが、痛ましい。

歳末募金にご協力をお願いします！

CYRの活動は、みなさまのご寄付で成り立っています。
来年も、カンボジアと被災地で支援活動を行うため、
募金のご協力をお願いいたします。

お振込みはこちらです

【郵便局】
郵便振替　00110-8-36227
加入者名（特活）幼い難民を考える会

【銀行】
三菱東京UFJ銀行 六本木支店（普）1351747
特定非営利活動法人幼い難民を考える会

認定NPO法人
幼い難民を考える会
CARING FOR YOUNG REFUGEES

〒112-0013 東京都文京区音羽 1-10-4 池田ビル 3F
TEL: 03-3943-6971　FAX: 03-3943-6973 / E-mail: info@cyr.or.jp / URL: http://www.cyr.or.jp

子どもたちの明日 104 号
発行日：2012 年 12 月 5 日　発行人：深水 正勝

＊幼い難民を考える会（CYR）は認定NPO法人です。個人・法人によるご寄付、相続財産のご寄付は、税制優遇措置を受けられます＊